

# LASER SWORD

レーザー・ソード

Nachimo Enatsu

江夏なちも



# L A S E R   S W O R D

Nachimo   Enatu



レーザー・ソード

ここは、岡山。市内でも一番の飲み屋街、田町。その南のはずれ、六階建てホテルの一階玄関から一人の男が急ぎ足で出て来た。上下黒のスーツはよれよれで、とてもさまになっていようには見えない。玄関横の駐輪場より愛車のママチャリに跨り、夏の暑さから一変した寒空の夕暮れに駅前と同じチェーン店であるホテルへ見回りに行くところであった。彼の名は伊藤邦彦、歳は、この二月で四十四歳になっていた。身長は一七四センチ、体重七二キロ。フレームの細い黒縁の眼鏡を掛け、若い頃は田村三兄弟の末っ子に似てると言われ、内心嬉しがつっていた。今はリチャードギヤーに少し似てると言われ、その気になっている。一見すらすらとして見えるが十年來の運動不足がたたり、内臓脂肪をしっかりと腹に貯めていた。

この夏の健康診断でメタボと宣告され糖尿病、高脂血症、高コレステロール・痛風と三拍子も四拍子も揃った立派なメタボラーである。学生時代、運動だけが取り柄で、勉強は二の次と毎日スポーツに励んでいた。大学は横浜の二流私立大学をなんとか卒業したが、結局何度か職を転々とし、最終的にスポーツクラブのインストラクターから支配人となつてはみたが、バブルがはじけた影響をもちにかぶり、スポーツクラブ閉鎖によ

るリストラの犠牲者となって失職してしまった。

三年前に妻を癌で亡くし、残った三人の娘を抱え、危機的状況にもかかわらず、本人  
いたって元気であり、

「まあ、何とかなるさ。捨てる神あれば、拾う神あり。世の中成るようにはしか成らん」と安易に考えていた。

人の良さだけが取り柄が功を奏したのか、新たなスポーツクラブの支配人に誘いがあつた。

五年ほどそのクラブで働いていたが、娘が大きくなり、大学へ行く年頃になると、そこでの給料ではやっていけない状況になってしまった。

そういう折に元会社の同僚が、空きがあるからうちへ来ないかと転職を勧められ、ほいほいとついていき、現在三つのホテルの総責任者としてあっちへうろろうろ、こっちへうろろうろとママチャリで動きまわっている次第であつた。

駅前に着き、駐輪場へ自転車置き、いつもなら真っ直ぐホテルへ直行するはずであつ

た。が、彼はふと（そう言えば、岡山駅に『サンステ』ができたが一度も見てないなあ。ちよつとのぞいて見よう）と思い立った。岡山駅構内を大改造し、名称を『サンステ』とつけていた。食料品街、ブティック、飲食街、みやげ物街など、かなりのスペースに大々的に展開していた。伊藤が思い立ったその時にはもうすでに半年も経っていた。ホテルから駅まで歩いてほんの三分ほどで着く。

駅に着くと彼は、（わあ、すげえ、きれいになつとるがな！）とまるで田舎者丸出しであつちこつちをきよろきよろ見回しながら歩いていた。

そんな折、突然、人生の転機が訪れるような出来事がおこるとは本人思つてもみなかつたのであつた。

『サンステ』の弁当売り場の一角で、主婦や仕事帰りの男女の人ごみを避けるようにして、シヨートカットの少女がジーパンと半そでのピンクのＴシャツ姿で手提げバッグを胸に抱えて立っていた。

「お嬢さん、歳なんぼ？」と七十過ぎの爺さんがいきなり女の子に声を掛けた。

この爺さん駅前では名の知れた悪党で、昔からこの辺を縄張りに、家出少女を駅前で見つけては、就職や住むところを世話するといつて、うらぶれたソーブランドに売り飛ばすのを生業にしている山木というやくざの組長である。組長といつても全員で四人しかいない万原組系の下の下の組長である。万原組は全国で三本の指に入る組織を持ち、西日本では最大級の暴力団である。

紋章は丸に万を入れ込んだマンゲンと世間では知れ渡っていた。今はここにいないが、背が一八四センチとひよろ高い山崎、歳はもうすぐ六十になる。もう一人は身長は一七〇センチくらいだが体重が一二〇キロとかなりデブでスキンヘッドの容姿に相当威圧感がある山根三十歳。残りの一人は一六五センチで五〇キロ。小柄で遣い走りの山野二十二歳と、なぜかどいつも山がつく。

この連中は伊藤の見回るホテルの前をうろちよろしているのです、彼らのことはよく知っていた。

といつても悪行はうわさでしか知らず、本当にそんな悪党なのかはよくわかっていなかった。



「十八です」とその女の子は答えた。

濃い目の化粧をしてはいるが、どう見ても十五、六歳にしか見えない。不安そうな顔をしていたが、話しかけられた男が七十過ぎの爺さんとわかり、少しホッとした顔になっていた。山木がひとのよさそうな年寄りを演じて「どっから来たん。誰か迎えに来てるんかな」と笑顔で尋ねた。

「山陰の沖ノ島から、親と喧嘩して出てきちゃった」と今時めずらしい程の可愛い笑くほをほっぺに浮かべて、少女は照れ笑いをした。山木の目の奥がキラリと光り、

「ほう、そりゃー悪い子じゃなあー親が心配しとるぞ」

「心配なんかしてないわあ。これが初めてじゃないし」と少女は少しふてくされたような顔をした。

「わしにもあんたと同じくらいの孫がおる。運動ばあしとるわ。あんた腹減ととるか？その辺の店で飯でも食うか？」少女は朝から何も口にしてなかった。

着の身着のまま飛び出してきたので、手元には三千円少々しか持っていなかった。

気のよさそうな爺さんだし、お腹もすいてた少女は「う、うん」と返事をした。

ちょうどその時、辺りをきよろきよろ見渡しながら、少女と山木が話している近くまで来た伊藤が、人ごみの中をまわりばかり見て前をすっかり見ていなかったのために、すれちがったサラリーマン風の男に足が引っかけ、前につんのめりそうになった。

伊藤はとっさに、バランスをくずしながらも倒れまいと右手を大きく振った。

その時、運が悪いことに右手に黒い営業かばんを持っていたため、そのかばんが右手と一緒に後ろから前に大きく振れた。

そしてそのかばんが、少女に話しかけていた山木の後頭部にハンマーパンチを食らわせてしまった。そしてふたりは前のめりに崩れるように倒れてしまった。

あわてて立ち上がった伊藤は、山木の爺さんの背中を起こしながら、

「す、すいません！大丈夫ですか。大変申し訳ないです！」と平身低頭で謝った。

山木の爺さんは突然のハプニングで激怒してしまい、伊藤の腕を振り払いながら、

「おんどれ何するんじゃわれ！この落とし前どうつけさらすんじゃ！」と怒鳴ってし

まった。

一瞬、人ごみでこった返っていた食品売り場がシーンと静まり返ったほどの迫力だった。

その声を聞いた少女が、あまりの凄さに目を丸くしてびっくりしてしまった。

そして、その場からすーと立ち去ろうとした瞬間、山木の爺さんの手が少女の手をつかんだ。

「あんた、わしと飯食いに行くんだつたな、さあ行こうか」とさつきとは口調がまったく違う山木が、少女を無理やり奥の飲食街へ連れて行こうとした。

その様子を見ていた伊藤は、駅前のやくざとわかり、（やべえー、あいつか。あの爺い無理やり女の子を連れて行こうとしとる。ほんまに悪やないか！）と思い、そのまま見過ごせば良かったものをなぜか自然にすーと体が爺さんと少女のほうへ行き、

「すみません！ほんまに怪我なかったですか？あれ！頭から血が出てます！」と少女の手を握っている左側の頭部を指した。

山木の爺さんは一瞬少女の手を握っている左手を離して、頭を触った。

その瞬間、少女はだーっと伊藤の横をすりぬけて駆け出して行った。

山木の爺さんはそれを追おうと伊藤の横を通ろうとした刹那、伊藤が山木の正面に回り、

「本当にすみません。わざとじゃないんで」と邪魔をした。

「うるせえ！じゃまじゃあーどけえ」と伊藤を押しつけ、あまり早くもなさそうな足で追っかけて行った。

その後ろ姿を見送りながら伊藤は、（あの女の子、無事に逃げられるかな。爺さん帰ってきたらやばいからさっさと退散しようっと！）と山木の爺さんが追っかけた方とは逆の飲食街へそそくさと去って行った。

伊藤は駅前のホテルへ立ち寄り、何事もなかったかのように、愛車のチャリンコに乗り元来た道を帰って行った。

次の日も同じように伊藤は、田町のホテルから前日のホテルの売上げなどの事務処理を終え、いつもの様に、愛車に跨り駅前に向かった。そこまでは、いつもと同じだった